

## 授業で使える当館所蔵地図

No. 75 地図1：『各務原』	地図2：『岐阜』
作成年 地図1：1932（昭和7）年	地図2：1973（昭和48）年
サイズ 地図1：46×58 cm	地図2：46×58 cm
作者 地図1：大日本帝国陸地測量部	地図2：国土地理院

地図1：1932（昭和7）年



地図2：1973（昭和48）年

★3

★2

★1



### 【解説】

各務原市は、1963（昭和38）年、旧稲葉郡那加町、稲羽町、鵜沼町、蘇原町の4町が合併して生まれ、南の木曾川と北の各務山に囲まれた東西に長い土地である。明治時代には、中山道沿いにまばらに集落が立地しているのみであった。その後は2つの地図にあるように、中山道だけでなく、高山本線、1927（昭和2）年に東鵜沼駅（現新鵜沼駅）まで開通した名古屋鉄道各務原線も見られるようになった。そして、これらの道路や鉄道といった交通の発展に伴い、市街地や工場が形成されてきた。それらに加え、各務原飛行場（現航空自衛隊岐阜基地）や岐阜高等農林学校（後の岐阜大学）などが市の中心部に立地していることから、周辺の土地利用の変化や市の人口の変化を関連させて考察させることが考えられる。

★1 各務原飛行場→航空自衛隊岐阜基地

1876（明治9）年、陸軍省が入会地の買収から始まり、砲兵演習場を経て1916（大正5）年から飛行場の整備が始まった。大正・明治・昭和にかけ、軍の「各務原飛行場」として使用され、日本で最も長く使用されている飛行場である。この飛行場ができたことにより、1923（大正12）年には川崎造船所（現川崎重工）各務原分工場が開所され、多くの人々が各務原市に移転してきた。それに伴って、多くの宿舍や公共施設が建設されている。



各務原飛行場

★2 岐阜高等農林学校→岐阜大学農学部

現在の各務原市民公園の場所である。1923（大正12）年、岐阜高等農林学校が設立され、戦中の1944（昭和19）年には岐阜農林専門学校と改称し、戦後の1949（昭和24）年、岐阜大学（農学部）となる。その後、1982（昭和57）年に岐阜市柳戸へ移転し、1988（昭和63）年に各務原市民公園となった。各務原市の中心であるこの場所に、広大な都市公園が位置しているのはそのためである。また、北東には岐阜大学の農場があり、現在は「学びの森」となっている。これらの名称の変化とともに、名古屋鉄道各務原線の駅の名称が変化していることにも着目するとおもしろい。



岐阜大学農学部

★3 金属工業団地

戦前からの航空機産業に加え、昭和20、30年代になると岐阜車体等の自動車を代表とする輸送機関連工場が発達した。地図1では、田や桑畑として利用されていた土地に、地図2のように国道21号線が新たに整備されている。旧4町から各務原市としてスタートした翌年である1963（昭和39）年には、新加納の南に「金属工業団地」が建設され、創業を始めた。各務原市は工業都市としての機能も大きくなった。



金属工業団地(1965)

【利用の例】（小学校3年生社会科「市のうつりかわり」の学習を中心に）

○既習の地図記号をもとに、土地利用の視点から昔の市の様子を概観することができる。

→地図1と地図2をそれぞれ順に見せ、地図記号の確認をしながら、多い記号や長く伸びている記号等に着目し、どんな土地利用だったかをイメージする。

○時間の変化に伴った土地利用の変化に着目させることができる。

→地図1と地図2の同じ位置を比較させ、土地利用が異なっていることに気付かせることで、変化の過程を調べる意欲を喚起することができる。

- ・同じ位置にある施設でも、名称の変化に気付く。
- ・地図記号をもとにし、増えているものや減っているものに気付く。
- ・川（新境川）や鉄道等変わっていないものもあることに気付く。

○交通と土地利用を関連させ、変化の背景について考えることができる。

→土地利用の変化に対し、その周辺の変化にも着目させる投げかけを行うことで、複数の視点を踏まえた考え方を働かせ、その背景を考えることができる。

- ・「地図2には、金属工業団地という、物を作る工場がたくさんできたのだね。ここに作るとよいことがあるのかどうか、周りの様子も見てみよう。」
- ・「地図2では、家がたくさん増えているところがあるね。ここに家をつくりたいと思う理由が、周りにもあるのか調べてみよう。」

【出典】

- ・『各務ヶ原飛行場100年史』（各務原市教育委員会 2017年）
- ・『保存版ふるさと各務原』（郷土出版社 2011年）